

アイヌの器物靈魂観について

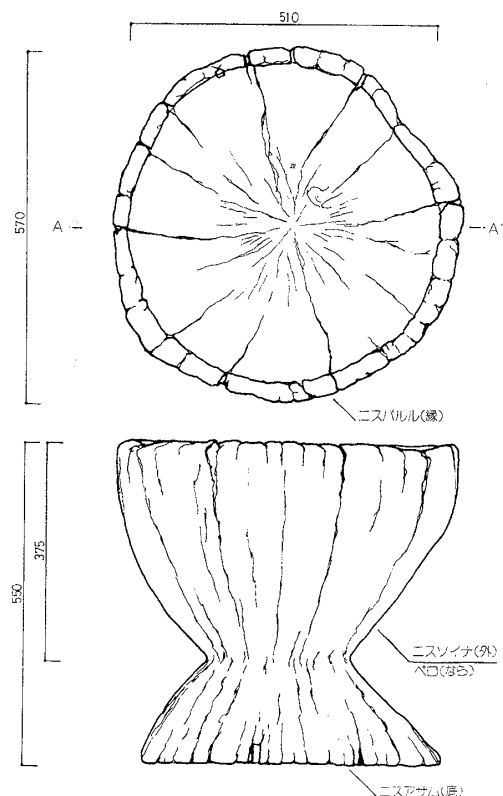
段上達雄

(1) アイヌの民具との出会い

昭和53年3月、私は北海道沙流郡平取町二風谷の萱野茂氏の家泊まり込んでアイヌの民具の実測図化に励んでいた。萱野氏が『アイヌの民具』を出版するにあたり、掲載図版とする実測図を武蔵野美術大学の生活文化研究会の仲間たちと1カ月かけて作成していたのである。ちょうど、大学院生時代に『佐渡の石臼』の原稿を書き終え、臼のもっている特別の性格について興味を抱きながら、次にどのように民具研究をすべきかと模索していた時代でもあった。

「臼の持つ特別の性格」とは、普通の民具には見られないような特別の使い方が臼ではされていたことで、臼は魂に関わる性格を持つのではないかと考え始めていたのである。佐渡郡羽茂町小泊では、葬式の時に死者を納棺した後、死者を横たえていた所に石製挽臼の上臼を置いていた。小泊の老人たちによれば、「石臼をごろんごろん大きな音を立てるように転がすもんだ。その後、戸主が寝ると死んだもんがいなくなっても寂しゅうないという。そして上臼に通夜の間、ロウソクを立てておく」のだというのである。そのため、「粉挽きには使わんが、葬式には必ずいるので、捨てずに取っておく」ともいっていた。また、小泊の墓地で半割りした石臼が墓石として使われているのを見たことがある。これは水子の墓だという村人がいた。それまで佐渡の石臼と石工技術を調査研究していた私は、年中行事や人生儀礼などの中に臼を用いる事例が全国にどれだけあるかを調べ始めていた。例えば、正月行事の中には「臼起こし」や「道具の年取り」がある。前者は歳の夜に伏せて倒しておいた臼を正月二日に起こして、実際に餅を搗いたり、用意していた餅を臼に入れて杵の音をさせる行事で、後者は臼の周りに道具類を置いて鏡餅などを供え、年を取らせる行事である。また、葬送儀礼にも臼を用いる例がいくつも見受けられる。

萱野氏宅で合宿生活をしながら図面を描いていた時、仲間の一人がニス(木製搗臼)の実測を始めた。生活文化研究会の会員たちはアイヌの民具の知識を充分持っていたわけではなかったので、作図を始める前に萱野氏に質問して、用途や特徴、素材などについて教わっていた。その情報によって、図の描き方が変わった例がいくつもあった。ニスもそのひとつだった。ニスはくびれ臼で、胴が細くなっており、稗や粟を脱穀したり、精臼するのに用いられていた。仲間が図に取ろうとしたニスの底に小さな欠き落としがあった。このことについて萱野氏は『アイ



ヌの民具』の中で次のように書いている。

事例1 毎日のように臼を使っていた主婦が亡くなると、臼の一部分を欠かしてそのかけらを死体と一緒に埋葬します。それは神の国で臼の命も復活し、女が道具で不自由しないようにとの願いでした。⁽¹⁾

ニス底部の切り欠けは、死者と共に葬ったかけらを取った跡だったのだ。これはアイヌは器物にもアニミズムとして靈魂を見たのではないかと思った。

アニミズム(animism)という言葉は、イギリスの人類学者であるタイラー (Edward Burnett Tylor) が“Primitive Culture「原始文化」”(1871)の中で「原始宗教」の特徴として用いたもので、ラテン語の anima (息・靈魂)に由来し、万物に靈が宿るという概念である。しかし、このアニミズムの概念はあまりにも広すぎて曖昧すぎるため、特定の民俗宗教の特質を捉えるには鋭さに欠ける。また、タイラーの唱えた進化主義的宗教観、すなわち、自然の精霊信仰から多神教、多神教から一神教へと宗教は進化し、一神教こそが最も進化した宗教であるとする考え方自体が19世紀的思想として、現代においては否定されているため、アニミズムという概念は用いにくくなっている。しかし、広義のアニミズム的事象を詳細に分析研究することにより、それぞれの民族文化の特色がより一層明確になるとも言える。この研究ノートでは、アイヌにおける器物観の中で、アニミズム的な事象を取り上げ、アイヌの靈魂観について考察していきたいと考えている。

(2) 神としての器物

萱野氏は、アイヌから神として考えられている器物の例として、ニス (臼)、ムイ (箕)、ニマ (食器)、イヌンペサウシペ (削り台)、チャ (丸木船)などをあげている。

事例2 「ニス (臼)」 臼をアイヌはニスカッケマツ (臼の淑女、臼の女神)として大切に取り扱い扱いました。たとえば、臼を使った後そのまま立てておくと、天の神々が臼の淑女のふところ深く素肌の隅ずみまで見るので、臼の淑女はたいへん恥かしい思いをし、そのことを恨んでその家の主婦を病気にさせるなど悪いことが起こる。それで臼を使った後は横に倒し、すだれをかけておくものだと、女の子は特に祖母や母親から教えられたものです。⁽¹⁾

事例3 「ニス (臼)」 大風が吹き荒れたとき、隣に住んでいた一人住まいの貝沢おろあっのというおばあさんの家の梁に臼がつり下げてあり、風のためにその臼がかすかにゆれているのを、子供のころ見た記憶があります。これは家の梁に太めのタラ (背負い縄)で臼を下げ、「ニスカッケマツ エコロキロロサンケワ チセエブンキネ (臼の淑女よ、あなたの力を出して家を守護してください)」と祈ると、臼の女神が大風から家を守ってくれると信じられていたからです。⁽¹⁾

事例4 「ニス (臼)」 お産の重いときに、臼にひえを入れて「ニスフチアコアスラニ (臼の老婆にお願いする)」といいながら、妊婦に搗かせて、お産を軽くしてもらうようお願いすることもありました。臼もフシコニス (古い臼)ほど靈力があると信じられていました。⁽¹⁾

事例5 「ムイ (箕)」 箕は女性と考えられていました。だから置いておくときはふところが見えないように立てかけます。また、ちょっと置くにしても家の上座の方に口の方を向けて置くと、上座には多くの神々がまつてあるので、その神々からふところの奥まで見られて箕の神が恥かしい思いをするので、必ず口は下座に向けて置くように注意されたものです。⁽¹⁾

事例6 「チャ (丸木船)」 舟を造る木が決まるとイナウを捧げ、山の神様に、「この木をアイ

ヌにおさげ渡してください」とお願いします。次に木の女神には、「あなたを舟に造り、美しいイナウで飾ります。そしてあなたの懐いっばいに穀物や鮭などを積みこみます。それは神としてもっとも名誉なことであり、ひいては神の国へお帰りになったとき神々から誉めそやされることでしょう。あなたの堅い肉を内側に包みこまれ、軟らかい肉を外側へお出してください」と祈って斧を入れるのです。⁽¹⁾

事例7「チプ（丸木船）」 夜、鮭漁に出かけるために舟を出す場合、アイヌは夜は舟の女神も眠っておられるものだと考えますから、眠りをさますために舟べりを棹で軽く叩きながら、「チツカケマツ イリクンネトタ ネワネコロカ アエツネマヌプ チェプネマヌプ チコンルスイクス エカシルウェネイツケウエタ イレスフチ パロチェオイキ クスタタイキアシリネナ アプンノウネブンキネワ ウンコレヤン」（舟の女神様、夜ではありますが、私たちの食べ物、そしていちばんは火の神様も一緒に食べるために鮭をとりに行きます。どうぞ、無事に川を渡してください）といえます。アイヌはすべての物に魂があると考え、目には見えないけれども人間と同じように昼間は働き、夜は眠っているものであると信じていたのです。⁽¹⁾

偶然かも知れないが、事例1から7までの、臼、箕、丸木船はすべて女性神として考えられている器物ばかりである。事例2では、使用していない臼を倒して休ませるという習俗について触れ、立てたままでは臼の女神が恥ずかしい思いをするためだからという理由が述べられている。事例3では臼の靈力について述べられている。実際に重し代わりに用いられていたとしても、臼には大風から家を守ってくれる靈力があると考えられていたことがわかる。事例4では臼が産神としての性格も持っていたことが明らかになる。

萱野氏は「アイヌはすべての物に魂があると考え」ていたと述べているが、それではあらゆる器物に対しても同様なレベルで見えていたのだろうか。アイヌの神々に軽重があるように、器物に宿る靈魂にも軽重があったと考えられる。例えば、臼が「臼の淑女」などと、重視されていたのに対して、杵はどのように考えられていたのだろうか。萱野氏は「イユタニ（杵）は臼と対で使用するもので、いつも一緒のところに置いてあります。臼がニスカケマツ（臼の淑女）といわれて大切にされてきたのに対し、杵は穀類を砕いて粉にすることができるくらい重くて力のあるものということで、ある意味で男性というふうに考えられ、臼と同様大切にされてきました」と述べ、地震の時には大地を杵で搗くと、地震がおさまるといふ俗信についても記している。しかし、臼が女神であると強く認識しているのに対して、杵は「ある意味で男性というふうに考えられ」とややトーンが落ちている。アイヌの人たちは、杵に臼ほどの靈性を認めていなかったのではないかと読みとることができる。臼を女性、杵を男性に見立てる考え方はアイヌだけではなく、日本人などにも見受けられる。性交から容易に連想されるからであろう。それでは、なぜアイヌの人たちは臼に靈性を強く感じたのだろうか。これは日本人が円形や球形のものを魂の形と見ていたことと関係があるのではないかと考えられるが、それがアイヌにも通じるかどうかは明確ではない。

事例5の箕も女神と考えられており、口を下座に向けて置くという作法について、臼と同様に女神が恥ずかしがるからという理由が述べられている。いずれも、これらの器物に宿っている魂は神靈であると考えられていた。

(3) 神の誕生

器物を製作した時、器物に霊を宿らせる儀式が行われていた。ひとつはチササンケ（舟おろしまつり）で、もうひとつはチセノミ（家への祈り）である。後者は器物の祭りというより、施設の祭りといった方が正しいが、アイヌが自ら作ったものということで、ここで紹介する。

事例8「チササンケ（舟おろしまつり）」 チササンケというのは舟を川へおろし川の神へ報告し、舟として新たな生命を与える入魂の儀式です。（中略）川岸の祭壇の前に舟を置き、チサナンカ（舟の顔）の穴にイナウを立て、ひえやあわなどの穀物や鮭、団子、たばこなどをお供えし、御神酒を捧げながらお祈りします。まず、川の神に舟を造ったことを報告し、山の神に舟材をさずけていただいたお礼をいいます。そして舟に向かって「今日からは、新しい神として人間と仲よく暮らしてください。あなたの力によって女も子供も川を渡ることができるでしょう。それらを安全に渡して下さいをお願いいたします」といい聞かせます。また祭壇の前には、舟を造ったときに使った道具やてこ棒などを置き、それらにもイナウその他のお供物を供え、「どうもありがとうございました。お陰様で立派な舟を造ることができました」とお礼の言葉を述べます。入魂式が終わるといよいよ進水です。（以下略）⁽¹⁾

事例9「チセノミ（家への祈り）」 ◎チセノミ＝家への祈り＝の準備。花ゴザを張り、シントコ＝うるし塗りのおけ＝を置く。／萱野 新しい家ができたときに、皆でおまつりをするとき、ああいうゴザを壁に張りめぐらす。／姫田 きれいなゴザですね。／萱野 あれも百年以上昔のものでしょう。

◎チセサンペ＝家の心臓＝を東の窓に入れる。／萱野 このイナウを団子にして、内側から見えないように、チセサンペと言って家の心臓として、柱の、ロロップヤラと言うんですけれど、東の窓の柱の後ろに埋めこみますね。／古い家をほぐしたときに、これが（チセサンペ）でて来たときに、「ああいいな、矢張り先輩たちは本当のことをやってくれた。」そんなことを、入れるときの考えよりも、ほぐすときにそういうことを思い出すね。でこうやって一本一本の柱の頭にね、イナウをやる。神様に、家としての家の神様にあげるわけね。そしてシントコは、アイヌの手に入って何百年になっているか、新しい家が出来ると、近所の人が一個二個くれたり、本家から別家へ2～3個くれたりというわけで入れられます。

◎ヨモギの矢に酒がそそがれる。チセノミが始まる。／姫田 これは？／萱野 これ、ヨモギですけども、こういうチセノミとって、新しい家ができてお祝いのおときには、ヨモギの矢をもって、両方の妻の方へ打ちます。このヨモギの矢を使うということは、ヨモギというのは、地上に生えた草のうちで一番最初に生えたから、このヨモギの矢で打たれると、どんな魔物も蘇生できない、生きかえることができないから、沢山使った木の霊をしづめるというか、そういうんでこういう矢を使うんですね。／長老が今イナウに御神酒をつけたりしながらお祈りをしているわけ。／姫田 囲炉裏の中に立てた、火の神様へ差し上げたイナウですね。（中略）

◎チセノミ。嬉しそうな顔、顔、顔。（中略）

◎チセチョッチャ＝屋打ち＝が始まる。萱野さんがまず弓矢をとりあげ、エトポク＝妻＝に打つ。次々に行く。／萱野 ああやって、矢にも御神酒をつけるわけね。もちろん弓にも。そしてこれを打つときは一番嬉しいですね。家を建てた者は……。／姫田 これは、儀式というか、名前があるわけですか？／萱野 ええ、チセチョッチャとって、家

に矢を打つ。／姫田 どんな意味をもっているのです？／萱野 ええと、沢山……、この家には大体種類にして20種類ばかりの木を使って、その中で精神の悪い木もあるから、その霊をしづめるということ。で、この話を聞かしてくれたのは、ウマカシテというお爺さん教えてくれたったなあ、「だから大切な儀式だよ」という風にね。⁽³⁾

このふたつの事例を見ていると、日本人が行う船の進水式と家の上棟式を連想する。特にチセノミでの矢を射るという行為は、日本人の行う上棟式との関連性について考えさせられるものがある。

(4) 器物の神送り

アイヌのカムイノミ（宗教儀礼）の中で、最も重要視されているのが i-omante（イオマンテ）である。イオマンテとは、イ（それを）とオマンテ（行かせる・送らせる）が結びついた言葉で、「それを行かせる」「それを送らせる」という意味となる。その対象となるのは神、すなわち神霊であり、「霊送り」と訳するのが最も適していると考えられている。イオマンテは、送る神霊が熊であるため、「熊送り」ともいわれてきた。

アイヌの人たちは、アイヌの住むアイヌ・モシリ（人間世界）の上方にカムイ・モシリ（神々の住む世界）があると考えてきた。そこでは神々はアイヌと同様の姿で同じような生活をしており、神々がアイヌ・モシリに降りて遊びに来る時には、さまざまな仮装をするとしてきた。例えば、熊の神ならば、家の壁に掛けてある熊の毛皮を被り、爪をつけてアイヌ・モシリを訪れ、その毛皮と肉を土産としてアイヌにもたらすというのである。アイヌが狩猟で獲物を捕らえるということは、神がアイヌのところに客として訪れたことになるのである。客として来訪した神（熊）の仮装を解く。すなわち熊を殺し、神霊として送別の宴を開いて、沢山のお土産とともにカムイ・モシリに送り出すのである。送り返された神は、カムイ・モシリで元の姿に戻り、多くの神々を招いて宴を開き、持ち帰ったり送り届けられた土産を分配して、アイヌ・モシリがいかにすばらしい世界かを話聞かせ、帰ってきた神だけではなく、うらやましく思った他の神々も競ってアイヌ・モシリを訪れようとするのだとされている。

アイヌは器物も霊送りをしてきた。イオマンテと較べれば、これは極めて簡素な儀礼だが、事例10から事例12をみれば、器物の霊送りの様相が分かるはずである。器物の霊送りは、器物が破損して使用に耐えなくなった時に行われる。これは、イオマンテの場合のように「神を送る（熊を殺す）」のではなく、「器物が死んだ」場合に行われると考えた方が適切ではないだろうか。それは一種の葬送儀礼であると考えた方がよいと思われる。

事例10「ニマ（木彫りの器・食器）」 ニマは長い間大切に使いますが、割れたり、ひびが入って使えなくなると、ひえやあわとたばこなどを添えて外の祭壇へ持っていき、「ニマカムイイライケレ オトウイワンパ オレイワンパ アイヌエイワンケツネ エアンウウレシ パピリカプ チキルウェネ タネ ニマカムイ エネヤッカ エオンネスク カムイコタノロ エコホシピ キトウイカシ スツテケトツ アオランケ ハルトウラノタンパクオッタ イモカトシカ エコロカネワ カムイオッタ エアラパヤツネ カムイオロワ エラムアイェクニツ ネナンコロナ ピリカノイワツワ エンコレヤン」（ニマの神様ありがとうございます。長い長い年月をアイヌのために働いてくだされ、私たちは子供を育てることができました。今はニマ神、あなたも年をとったので神の国へおもどりください。それで天国より祖母の手に降された穀物とともにたばこもあわせてたくさんのお土産を持ってお帰りください。神の国へお帰りになると、あなたは神々から誉めそやされるでしょ

う。お気をつけて神の国へお帰りください。ありがとうございます)とお礼の言葉をいながら外の祭壇に置くのです。これはニマに限ったことではなく、その場で使い捨てるような道具はともかく、長く役にたった道具が使えなくなったときは、何でも同じように神の国へ送り返したもののなのです。⁽¹⁾

事例11「サラニブ(背負い袋)」サラニブは、アイヌの日々の生活に影のようによりそって役立っていた道具ですから、ウウエペケレ(昔ばなし)の中にも、サラニブが困っている子供を黙って見ていることができず、人間の姿になって子供を育てたという話があります。それは、サラニブにも魂があり、人間が困っているときは助けてくれるし、また逆に人間がサラニブを粗末に扱ったりすると悪さをするものだから、使える間は大切に使うものですよという教えなのです。そして、サラニブも他の大切な道具と同じく、古くなって役にたたなくなったものは、外の祭壇のところへ持っていき、穀物やたばこを供え、お礼をいって神の国へその魂を送りかえます。⁽¹⁾

事例12「イヌンペサウシベ(削り台)」アイヌは、これら自分で生み出した器物や道具にも魂があるものと考えて大切に使いました。カムイノミ(神まつり)のときなどお酒があれば、必ずツッキパスイ(捧酒箸)でこの削り台にも御神酒をあげて、日ごろの労をねぎらいます。また、長い間役にたってくれた削り台が古くなって使えなくなると、抜き取って外の祭壇に持っていき、ひえやあわなどの穀物やたばこを供えて「長い間人間のために働いてくださってありがとうございました。これらの穀物やたばこをおみやげとして神の国へ持ってお帰りください。神の国では、あなたは一段と位の高い神として遇されることになるでしょう」といいながら下に置きます。そして、また新しく別の丸太を埋め込んだのです。⁽¹⁾

藤村久和氏は器物の霊送りについて、次のように記している。⁽⁴⁾

「長いあいだご苦労さまでした、ゆっくり休んでくださいと感謝の言葉を述べたあと、家の外にあるヌサと呼ばれるところにそれらを持って行く。ヌサというのは、送られる霊があゝの世へと旅立つ場所であり、それぞれの家が一つずつ持っている。そこには、その家がこれまで送ってきたクマやキツネなどの頭骨がきちんと飾られており、神聖な場所である。そのヌサへ、送る器物を持って行って、ヌサを守る女神にあとのことをお願いし、お任せする。年月が経つと、それらがだんだんたまってきて、けっこう場所もとるので、今度は各家ではなく村共同の霊送りの場で、チパと呼ばれるところへ持って行く。あるいは臼などは、巨木を用いて作ったものなのだから、山の大きな樹木のそばに置いて、あとのことはその樹木の神様をお願いする」

「器物を送る場合は、半年分ぐらいまとめて送る。お椀が一つこわれるたびに送るのではなく、ある程度たまるまでとっておく」

また、萱野茂氏も器物の霊送りについて次のように述べている。⁽²⁾

「物に魂があると考えていただけに、古くなった道具の取り扱いも生き物と同じです。例えばニマ(器)に穴が開いて使えなくなったときには、外の祭壇の左向こう側へそっと置き、「ニマの神様、長い間アイヌのために働いてくださって本当にありがとう。この物をおみやげに神の国へお帰りください」といいながら、ヒエとかアワ、たばこなどを供え、自然に朽ち果てさせるのです」

器物の霊送りの場は、個人の家ではヌサと呼ばれる祭場であり、集落ではチパという祭場である。また、器物の出身を考慮した祭場を設定することもあった。古くなった器物は丁寧に霊送りされたのである。

(5) 殺される器物

アイヌは亡くなった人が愛用していた器物と一緒に埋葬することもあった。

事例13「イスパスイ(箸)」 人が亡くなったときは、生前使っていた箸と一緒に埋葬します。

これは、神の国へ行っても使い道具に不自由させないために持たせてやるのです。⁽⁴⁾

箸を副葬するのは、神の国での生活に不自由させないためだそうです。ここで想起していただきたいのは、事例1のアイヌ女性の埋葬時に副葬された白のかけらである。当然、大きな白自体を遺体と一緒に埋葬することは、不可能ではないにしろ、無理が多いはずである。白の一部を副葬することにより、白自体を副葬する代わりにしたのだ。しかし、器物の一部を欠くことは、もうひとつ別の意味があるようだ。藤村久和氏は古い器物を送る時に傷つける理由を次のように述べている。

「古くなったから送るというものには、古いといってもまだ霊がそのなかにあるので、小刀で傷つけるなどして使用できないものにする。そうすると霊はその物から離れてあの世に行けるのだという。葬儀の際に、お墓に入れる莫蔭に傷つけるというのは、実はこの考え方なのである」

これは、副葬にあたって、実際には使用不可まで器物を壊すこともあったかも知れないが、器物を傷つけることは象徴的な行為でしかなかったようである。この傷つける行為は、器物そのものから霊を解放するものだと考えられていた。これも霊送りの考え方に立った行為だが、古くなった器物の霊送りと違って、これは死者のために「器物を送る」、すなわち「器物を殺す」という行為ではなかつたろうか。このような言い方は日本人的な考えで、アイヌは殺すという意識は持っておらず、あくまでも霊を送ると意識していたと思う。

(6) 器物の変身説話

アイヌの故事来歴談は、北海道東北部・日高南部・千島列島南部・樺太地方では「ウチャシクマ」、樺太西海岸北部では「ウチャシコマ」、日高北部から西方の太平洋沿岸地帯では「ウパシクマ」とそれぞれ呼ばれていた。藤村久和氏が『アイヌの神殺しについて』で取り上げた、樺太南部東海岸の27点の故事来歴談の中に、次のような事物の起源説話が含まれている。

事例14「国造神の忘れがたみ」 国造神が喫煙しようとしてシラカバの火きり台と火きり棒を作って発火させようとしたが黄色の粉末と黒い粉末が生じるだけであった。腹を立てて投げ捨てるとう黒い粉末はヒグマに、黄色い粉末は疱瘡の素となって飛散した。次いで燧石同士を打ち合わせると発火に成功し、喫煙後このまま置いておくのはよくないと考え、一つを海手に投げ込むとそれは大きなクジラになり、もう一つを山手に放るとそれはトドになった。しかし、トドとヒグマは仲が悪くけんかばかりするので国造神は両者を招いて仲直りさせようとしたが相互にゆずらず、ついに競争をさせ敗者は海に退くことになり、以来負けたトドは海にすむことになったが、ヒグマへの恨みは今も忘れず、一群となって陸近くの岩礁で今も山に向かって吠えているのだと。⁽⁵⁾

事例15「偉い神の発火具」 偉い神が火をおこそうとしてドロノキから火きり台と火きり棒をこしらえた。しかし、白い粉末と黒い粉末が生じるだけで火はついに起きなかった。憤った神はそれらを投げ出した。すると、白い粉末は淫魔となり、黒い粉末は疱瘡の素となった。ついで、火きり台は、林の怪鳥となり、火きり棒は山手の怪鳥になり、いつしか人前に現れては多様な悪さをするようになった。(後略)⁽⁵⁾

事例16「国造神の忘れもの」 国造神がこの世を造作したときに斧を六〇本も使い、そのまま

放置して国造神は天上界に戻られた。斧は長い時間のうちに腐食し始め、多くの魔神や病魔が誕生し、人々が苦しめられる基となった。⁽⁵⁾

藤村氏は、アイヌの故事来歴談での神への変身には、①天罰を受けて変身させられる、②丁重な扱いを受けて変身させられる、③適切な扱いもなく勝手に変身する、④神殺しにあって変身するなど、4つの型があるとしている。そして、事例14「国造神の忘れがたみ」を②丁重な扱いを受けて変身させられる型に、事例15「偉い神の発火具」と事例16「国造神の忘れもの」は③適切な扱いを受けないでの変身の型に分類している。

事例14では、着火しなかったシラカバの火きり台と火きり棒を怒りのあまり投げ捨てると、ヒグマと疱瘡の素に化したのに対して、熟慮した上で、発火に成功した燧石を海に投げ込むとクジラになり、山に投げるとトドになったというのである。また、事例15では同様に着火せずに、摩擦でできた粉を怒って捨てたら、淫魔と疱瘡の素になったという。ここで考えられるのは、処置される対象となるものがもともと素性が悪く、行為の主体者（ここでは偉い神、あるいは国造り神）が怒りという負の感情のもとで処置した器物は、人間に悪影響を及ぼす「神」に変身するという規則性がうかがえることである。

萱野氏は「アイヌは自分たちの作ったものの一点一点に魂が入っていると信じ、生けるものとして扱いました。しかも、精神のよい人が作った物にはよい魂が宿り、反対に精神の悪い人が作った物には悪い精神が宿るといわれています。ですからどんなに物を作るのが上手な人であっても、精神の悪い人には物を作ることを頼みませんでした⁽²⁾」と述べている。この精神の悪い人が作った器物には悪い精神が宿るという考え方は、精神の悪い状況、すなわち、神が怒りで我を忘れていた状態にも通じるのではないだろうか。

また、事例16の放置された斧が腐食して魔神や病魔に化身したというのは、適切な措置が施されなかった器物が恨みをもったためと考えられる。なお、これらの器物は国造神、あるいは偉い神様が使った道具ということで、変身する前から霊的に特別な存在であったとも考えられる。

(7) 結語

ここで、いままでの事例をもとにアイヌの器物靈魂観について、まとめてみたい。

- ア) アイヌは、動物や樹木などの自然物、それに火などを神として認識していたが、アイヌ自らが作った身近な器物にも靈魂があると考えていたこと。
- イ) ニス（臼）やムイ（箕）、チッ（丸木船）のように神として意識されていた器物があり、アイヌは器物によって靈の格に差があると考えていたらしいこと。
- ウ) アイヌは丸木船や住居を新たに造った時に、入魂の儀式を行っていたこと。
- オ) 器物の靈はその器物を作った人の靈の影響を受けると、アイヌは考えていたこと。
- カ) 壊れた器物を「捨てる」時には、アイヌは一種の葬送儀礼ともいえる靈送りをしたこと。
- キ) アイヌでは、人が亡くなった時、その人が愛用していた器物（箸・臼など）を副葬した。そして、副葬する時には、その器物の一部を欠いて器物としては「殺す」こともあったこと。

以上の点から、アイヌは自然物以外の器物にも靈魂があると考えており、そのために器物の中には入魂儀礼が行われるものがあり、また、多くの器物については一種の葬送儀礼ともいえる靈送りをしていたことがわかった。アイヌの器物靈魂観は、我々日本人の精神文化にも通じるものがあるのではないかと私は考えており、今後の研究のために、この研究ノートをまとめた次第で

ある。また、この研究ノートを作成する契機となったのは、別府大学アジア歴史文化研究所での研究発表であり、筐底深く眠っていたメモを引っ張り出してまとめ直すこととなった。発表の場を作っていただいた、研究所長の利光教授にまずお礼を申し上げる。なお、この研究ノートを執筆するにあたって、大先学である萱野茂氏と藤村久和氏の業績に負うところが多く、両氏に深く感謝するものである。

〈注〉

- (1) 萱野茂『アイヌの民具』アイヌの民具刊行委員会・1978
- (2) 萱野茂「男の作る民具 女の作る民具」『アイヌの本』別冊宝島・宝島社・1993
- (3) グループ現代『チセアカラ われら いえを つくる—シナリオ集 付 資料—』1974
- (4) 藤村久和『アイヌ、神々と生きる人々』小学館・1995
- (5) 藤村久和「アイヌの神殺し」季刊自然と文化31『カミ殺し』日本ナショナルトラスト・1990